

父親の家事・育児と父親および母親の主観的健康

蟹江 教子

(お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程)

1. はじめに

高学歴化、就労意欲の変化などを背景に女性、特に既婚女性の社会進出が進み、有配偶女性における就業者の割合は48.4% (1602万人) に及ぶ (総務省 2004「労働力調査」)。仕事を持つ既婚女性の増加により、「夫は仕事、妻は家庭」という性別役割分業は崩れつつあり、男性も家事や育児を分担することが求められている。

これまで、男性の家事や育児への関与は、女性の家庭役割負担の軽減や乳幼児の発達という視点から検討されることが多く、本人にとってどのような影響があるのか、あまり検討されてこなかった。しかし、女性の社会進出や少子化、さらには高齢化も影響して、今後も男性の家事や育児への参加要求は高まることが予想され、父親の家事や育児への関与が、父親自身、あるいは配偶者である妻に与える影響について検討することは、父親の子育て参加を円滑に進めるための環境整備に不可欠であろう。共働き夫婦が多数派になりつつある現在、家事や育児をどのように分担しあえば、夫、妻ともに良好な生活を送ることができるか、どのような家庭内サポートシステムを構築すればよいか、この点について有益な示唆を得ることが本研究の目的でもある。

2. 先行研究

女性の社会進出が日本に先行した欧米では、仕事と家庭という多重役割に関する研究蓄積が多

い。しかし、男性の家事や育児への参加は大して進まず、それに伴う女性の二重・三重負担は依然として深刻であり、21世紀における主要なテーマである (Barnett 1998)。

当初、仕事と家庭の多重役割に関する研究の対象は既婚女性であった。しかし、共働き夫婦の増加に伴い、米国では1980年代より父親に関する研究が、家族社会学者や発達心理学者の間で本格的に始まり (石井クンツ 1998)、対象を男性へと拡大していった。

わが国においても、女性の仕事、家事、育児の多重役割負担という枠組み (土肥・広沢・田中 1990; 吉井・山崎 1999) に加えて、男性を対象とした研究 (山崎 1991) や夫と妻の両方を対象とした研究 (福丸 2000) も行われるようになってきている。しかし、研究そのものが少なく、日本と欧米では社会システムも異なるため、先行研究の検証を含めて、検討すべき課題は多い。

家事や育児は、本人だけでなく、配偶者や子どもにも影響するため、夫婦関係、親子関係を取り上げる際、無視することができない。特に夫婦間における家事や育児の分担は家族研究全般において重要な課題である (Pina & Bengtson 1993)。

健康社会学においても、精神的健康や健康度の自己評価では、男女差 (女性の方が不良) が存在するといわれており、様々なバイアスを調整した後も、男性と比較して女性の方が、不安、自信喪失、抑うつ、心配などの心理的ディストレス (イライラなどのネガティブな感情状態) を経験しやすいことが明らかにされている (Aneshensel

1992; Mirowsky & Ross 1995)。これは、男性に比べて女性は家事労働が多いためであると考えられており (Bird & Fremont 1991; Glass & Fujimoto 1994)、実際、ジェンダー差は結婚している男女の間で最も大きい。

賃金という経済的な報酬を伴う仕事と異なり、家事、なかでも育児がもたらすのは主観的で個人的な報酬である。家事や育児は、そのペースや仕事の順番を自由に決めることができ、食事の準備や衣類の洗濯、部屋の掃除は、快適な生活環境を維持するために必要不可欠である。家事や育児は生産的な仕事であり、運動にもなる (Bird 1999)。しかし、定型的で習慣化された仕事でもあり、雑用も多く、いくらやってもきりが無い (Oakley 1974; Glass & Fujimoto 1994)。高度な技術や知識を要求されるわけでもないため、家族はもちろん、他人から感謝されたり評価されたりすることもない。そのため、家事に多くの時間を費やすことは抑うつを増加させる (Glass & Fujimoto 1994)。賃金収入を伴わないため、仕事そのものが一般的な就労に比べて、低く見られがちである。

研究職に従事する男女を対象に家事労働と心理的ストレスとの関連 (小泉・矢富・織田・須藤 1996)、家事労働とストレスホルモンとの関連 (須藤・三木・矢富・織田・川崎 1995) を検討した研究においても、家事労働負担はディストレスなどを高めることが報告されている。

欧米の先行研究では、家事や育児は、その行為に要した時間によって測定することが多く、測定された時間を加工することによって、例えば夫婦間の分担割合など、新たな変数を算出している。しかし、日本では、直接家事労働や育児に費やした時間を聞くことは、無回答や回答拒否が増えるため、必ずしも有効とはいえない (石井クンツ¹¹⁾)。家事についての質的な研究によると、女性がする家事は、掃除、料理、洗濯のように、毎日繰り返して行われる仕事が多いのに対して (Berhheid 1984; Berk 1985)、男性は、家庭大工、庭掃除、ゴミ捨てなど不規則で回数の少ない仕事が多い (Berk 1985; Pleck 1985)。家事労働にかかる時間

は個人差も大きい (直井編 1989)、時間という量的側面に注目しただけでは、内容やプロセスについては十分知ることはできない (石井クンツ 1997)。

子育てに関しても、母親は授乳や衣類の交換など、必要不可欠で子どもの基本的な生命維持に関わる部分を担当することが多いが (LaRossa 1988)、父親は遊びのように、補助的で楽しく、責任を伴わない行為が多い (船橋 1999)。

30～39歳の男性の1週間の家事関連時間が33分 (総務省 2001「社会生活基本調査」) という現状を考えると、時間という側面よりも、父親は家事や育児を、実際の行動レベルでどのようにとらえているのかを明らかにし、どのような内容に関与しているのか、それが父親自身あるいは母親にどのような影響を与えるのか。このような点から検討する方が、父親の家事や育児への関与が非常に少ないわが国において、戦略的に男性の家事・育児への関心を高め、関与を促すために、有効であると思われる。

父親の家事・育児への関与が本人および家族 (配偶者と子ども) に与える影響については、抑うつ (Depression)、不安 (Anxiety)、心身の自覚症状や訴え (symptoms)、満足感 (satisfaction) などとの関連が、検討されてきた。これらはHappiness (Argyle 1987)、Well-Being (McLanahan & Adams 1987; 松田 2001)、主観的健康 (Bowling 1997) などと、総称されている。本研究では、心身の自覚症状や訴え (symptoms) を中心に議論を進めるため、主観的健康という表現を用いる。また、抑うつ、不安といった陰性感情 (negative affect) と、充実感や満足感などを含む陽性感情 (positive affect) は、必ずしも連動しているわけではなく、独立して働くことが明らかにされている (Jorm 1990など)。そこで、陰性感情と陽性感情の両方を取り上げ、父親の家事・育児への関与との関連を検討する。

なお、本研究の目的は、あくまでも父親の家事・育児が父親自身あるいは配偶者である母親の主観的健康への影響を検討することであるが、母親自身の家事や育児の量も十分影響していると思

図表-1 対象者の基本属性

		世帯レベル (n=191)		個人レベル 父親(n=191) 母親(n=191)	
世帯収入(%)	400万円未満	8.6			
	600万円未満	11.2			
	800万円未満	14.2			
	1000万円未満	10.7			
	1000万円以上	55.3			
子ども数(%)	1人	23.5			
	2人	58.1			
	3人以上	18.4			
年齢	平均(標準偏差)		39.0(5.4)		36.6(4.4)
	レンジ		26-58		24-51
学歴(%)	大卒		73.0		53.0
	大卒以外		27.0		47.0
職種(父親のみ)(%)	管理・専門職		56.4		
	事務販売職		24.6		
	労務・現業職		19.0		
労働時間(父親のみ)	平均(標準偏差)		58.7(17.5)		
就業状況(母親のみ)(%)	無職				41.9
	フルタイム				21.7
	パートタイム				18.7
	その他				17.7

われる。本分析に用いた調査では、家事についてのみ母親の頻度について父親にたずねている。そこで母親の家事についても、分析に加えることにする。

3. 方法

(1) データ

東京都内の幼稚園、保育園に通う園児(年少、年中、年長)を持つ父母を対象に、2005年1月から2月にアンケート調査を実施した。父親用調査票と母親用調査票を1セットとして、幼稚園、保育園を通じて配布した。調査票は自宅で回答してもらい、郵送により回収した(一部の園については、郵送のほか、園に回収箱を設置した)。調査は無記名式で行い、分析の際、プライバシーに配慮すること、調査への協力は本人の自由意思であること、の2点を保育園、幼稚園の関係者には口頭と文章で、父母に対しては協力依頼文の文面で説明した。

調査票は517セット配布し、285世帯から回答を

得た(回収率55.1%)。そのうち、回答に不備があるものを除き、最近1カ月、子どもと生活を共にしており、(単親世帯や単身赴任中、長期出張中などは除く)、父親と母親の両方から回答を得ることができた父親191票、母親191票(191組)を分析の対象とした。

(2) 分析に用いた変数・尺度と回答者の属性

従属変数として、抑うつ症状、疲労症状(男性のみ)、育児不安

(女性のみ)、生活への満足度を用いた。

抑うつ症状は、アメリカ国立精神保健研究所(National Institute of Mental Health)が開発したうつ病の自己評価尺度CES-D(The Center for Epidemiology Studies Depression Scale)の日本語版から12項目を用いた(島 1998; 清水 2001)。CES-Dスケールは、最近1週間、「普段は何でもないことでもわずらわしいと感じたこと」「憂うつだと感じたこと」などがどの程度の頻度であったかを「全くなかった」から「ほとんど毎日」まで、4件法でたずねるものであり、各回答に1~4点を与え、加算して用いた。得点が高いほど、抑うつ症状が高いことを示している。父親の平均は17.86(SD=5.35)、母親の平均は19.08(SD=4.60)で、母親の方が高かった。Cronbach係数は父親.90、母親.89であった。

疲労症状は、蓄積疲労スケール(中央労働災害防止協会²⁾2004)を用いた。このスケールは過重労働による健康障害防止のため労働者自身が疲労の蓄積をセルフチェックするツールとして開発されたものである。蓄積疲労スケールは、最近1カ月、「イライラする」「よく眠れない」「やる気が

図表-2 父親の家事・育児についての因子分析結果 (n=191)

	F1 食事	F2 掃除	F3 基本的育児	F4 遊び
食事の用意	.950	-.008	-.089	-.012
食料品の買物	.631	.008	-.001	.026
食事の片付け	.431	.238	.182	-.113
風呂の掃除	-.057	.883	-.004	-.021
部屋の掃除	.009	.576	.078	.021
洗濯	.254	.548	-.122	.080
洋服の着脱の手助け	-.046	-.056	.918	-.079
トイレの介助	-.014	.072	.680	.025
寝かしつけ	-.018	-.003	.633	.162
絵本	-.193	.045	.522	.232
幼稚園・保育園の送り迎え	.292	-.025	.433	-.036
子どもと一緒に朝食	.131	-.014	.317	.055
おもちゃを使う遊び	-.153	.077	-.118	.925
体を使った遊び	-.065	-.009	-.047	.825
数や文字などを教える	.018	.056	.066	.666
子どもと一緒に夕食	.233	-.125	-.012	.604
子どもと一緒に風呂	.072	.015	.136	.503
子どもと散歩	-.077	.034	.051	.492
子どもと会話	.191	-.114	.248	.466
子どもが散らかした後片付け	.070	.032	.333	.341
F1				
F2	.339			
F3	.357	.375		
F4	.232	.339	.681	

出ない」など13項目について、自覚症状がどの程度あるのか、「ほとんどない」から「よくある」まで3件法でたずねた。それぞれの選択肢に1～3点を与え、加算して用いた。Cronbach係数は.89であり、得点が高いほど、疲労症状が高いことを示す。父親の平均は19.41 (SD=5.36)であった。

育児不安は、牧野・中西 (1985) による12項目短縮版育児不安尺度を用いた。回答は「全くない」から「よくある」まで4件法で行い、それぞれの選択肢に1～4点を与えたものを加算した。Cronbach係数は.69であり、得点が高いほど、育児不安が高いことを示し、平均は29.64 (SD=4.44)であった。

生活への満足度は、WHOが開発したSubjective Well-being Inventory (SUBI) (Nagpal and Sell 1992; 大野・吉村 2001)、「消費生活に関するパネル調査」(家計経済研究所 2003)などを参考に項目を検討し、回答のしやすさという点から、「あなたは生活全般に満足していますか」「あなたは、幸せだと思いますか」という2項目を選択した。前者の質問については「非常に不満」から「非常

に満足」、後者については「全く思わない」から「非常に思う」まで、5件法で回答してもらい、それぞれの回答に1～5点を与え、単純加算した。得点が高いほど状態が良好であることを示しており、2変数の相関は父親 .64、母親 .72であった。父親の平均は8.15 (SD=1.60)、母親の平均は7.98 (SD=1.51)で、両者の間に有意な差は認められなかった。

独立変数として、夫婦に共通な変数として、世帯収入と子ども数を用いた。世帯収入は父

親の、子ども数は母親の回答によるものである。

世帯収入は「400万円未満」が8.6%、「400万円以上600万円未満」が11.2%、「600万円以上800万円未満」が14.2%、「800万円以上1000万円未満」が10.7%、「1000万円以上」が55.3%と過半数を占め、高額所得者が非常に多い。これは、都心区部の園が調査対象に含まれていること、母親がフルタイム就労している世帯で収入が高いこと、などによる。

子ども数は「1人」が23.5%、「2人」が58.1%、「3人以上」が18.4%であった。

個人レベルの変数として、父親は年齢、学歴、職種、労働時間、家事・育児への関与状況を用いた。

父親の平均年齢は39.0歳 (SD=5.4)、「大卒」が73.0%、「大卒以外」は27.0%であった。職種は「専門・管理職」が56.4%、「事務販売職」が24.6%、「労務現業職」が19.0%であった。1週間あたりの労働時間は58.7時間 (SD=17.5)であった。父親の労働時間は、父親の家事・育児への関与を規定する非常に重要な変数(加藤・石井クンツ・牧野・土谷 1995など)であると同時に、抑

図表-3 分析に用いた変数

	レンジ	父親(n=191)		母親(n=191)	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差
抑うつ	12-48	17.86	5.35	19.08	4.60 *
疲労症状	13-39	19.41	5.36		
育児不安	12-48			29.64	4.44
生活満足	2-10	8.15	1.60	7.98	1.51
食事関連家事	0-21	2.76	3.86		
掃除関連家事	0-21	2.33	3.98		
基本的育児	0-56	12.92	9.82		
あそび的育児	0-42	19.24	11.51		
妻の家事	0-42	30.02	10.26		

*p<.05

図表-4 父親と母親の抑うつについての重回帰分析の結果

	父親(n=191)		母親(n=191)	
	モデル 1	モデル 2	モデル 1	モデル 2
	β	β	β	β
世帯収入				
400万円未満	.085	.082	.131	.123
600万円未満	-.083	-.092	.114	.101
800万円未満	-.093	-.092	.018	.021
1000万円未満	.170 *	.166 +	.052	.068
1000万円以上		reference		
年齢	-.180 *	-.172 *	-.023	-.012
学歴 (1=大卒)	.049	.046	.030	.031
父親の職種				reference
管理・専門				
事務販売	.148 +	.148 +		
労務・現業	.075	.088		
父親の労働時間	.171 *	.179 *	-.651 *	-.508
父親の労働時間の2乗			.594 +	.441
母親の就業状況				reference
無職				
フルタイム	-.073	-.077	.010	.044
パートタイム	.007	.010	-.101	-.132
その他	.010	.007	.091	.092
父親の食事関連家事	-.067	-.085	.173 +	.197 *
父親の掃除関連家事	.012	.002	.013	.002
父親の基本的育児	-.087		-.239 **	
父親のあそび的育児		-.037		-.289 **
母親の家事	-.247 *	-.224 *	-.165 +	-.173 +
調剤済みR2値	.064	.056	.043	.050

+p<.10, *p<.05, ** p<.01
 β は標準偏回帰係数

うつ、疲労症状などにも影響する変数である。

父親の家事や育児への関与状況は、小泉ら(1996)や父親の家事・育児参加の規定要因についての研究(松田・鈴木 2002; 永井 2001)、親役

割についての研究(牧野・中野・柏木 1996)、共働き夫婦のライフスタイルに関する研究(東京都立労働研究所編 1994)などを参考に、一般的で、父親の実行頻度が比較的高いものを、家事6項目、育児14項目を選択した(詳細は図表-2を参照)。実際に行った頻度を「ほとんどない」から「ほぼ毎日」まで5段階でたずねた。分析にあたっては、「ほとんどない」=0、「月に2~3日」=0.6、「週に1~2日」=1.5、「週に3~5日」=4、「ほぼ毎日」=7として、得点化して用いた。

母親の変数としては、年齢、学歴、就業状況、家事量の4変数を用いた。母親の平均年齢は36.6歳(SD=4.4)であり、「大卒」は53.0%、「非大卒」は47.0%であった。就業状況は「無職」が41.9%、「フルタイム」が21.7%、「パートタイム」が18.7%、「その他(経営者、家族従業員、自由業など)」が17.7%であった(図表-1)。

母親の家事は、父親による回答である。また質問内容は父親と同じであり、6項目について5段階でたずねた。因子分析の結果、1因子構造であることが確認されたため、6項目を加算して用いた。

図表-5 父親の疲労症状についての重回帰分析の結果

		父親 (n=191)	
		モデル 1	モデル 2
		β	β
世帯収入	400万円未満	.097	.085
	600万円未満	-.014	-.021
	800万円未満	-.054	-.052
	1000万円未満	.059	.070
	1000万円以上	reference	
年齢		-.079	-.087
父親の労働時間		.165 *	.160 *
職種 (1=管理専門)		-.151 +	-.138 +
父親の食事関連家事		-.036	-.016
父親の掃除関連家事		-.019	-.023
父親の基本的育児		-.133	
父親のあそびの育児			-.171 +
母親の家事		-.218 *	-.249 **
調剤済みR2値		.055	.062

+p<.10, *p<.05, ** p<.01,
 β は標準偏回帰係数

図表-6 母親の育児不安についての重回帰分析の結果

		母親 (n=191)	
		モデル 1	モデル 2
		β	β
世帯収入	400万円未満	.035	.065
	600万円未満	.093	.101
	800万円未満	.145 +	.136 +
	1000万円未満	.137 +	.131
	1000万円以上	reference	
子ども数		.142 +	.122
父親労働時間		.054	.049
母親の年齢		-.038	-.042
母親の就業状況	無職	reference	
	フルタイム	-.023	-.026
	パートタイム	.039	.038
	その他	.090	.098
父親の食事関連家事		.035	.035
父親の掃除関連家事		-.174 *	-.140 +
父親の基本的育児		-.126	
父親のあそびの育児			-.200 *
調剤済みR2値		.085	.066

+p<.10, *p<.05, ** p<.01
 β は標準偏回帰係数

欠損値については、抑うつ、疲労症状など尺度として用いたものについては過半数を超える回答があったものについてのみ各人の平均値を、カテゴリデータについては最頻値で代替した。

4. 結果

(1) 家事・育児

家事や育児を、1週間あたりの頻度によってとらえた場合、各項目間にどのような関連があるのだろうか。この点について検討するため、父親の家事（6項目）と育児（14項目）について、因子分析を行ったところ（図表-2）、4因子が抽出された。

第1因子は、「食事関連家事」であり、「食事の用意」「食料品の買い物」「食事の片付け」から構成されていた。第2因子は、「掃除関連家事」であり、「風呂の掃除」「部屋の掃除」「洗濯」という項目から構成されていた。第3因子は、「おもちゃを使った遊び」「体を使った遊び」「数字や文字などを教える」「夕食」「お風呂」「散歩」「会話」「後片付け」という項目から構成されており、あそびの要素を含み、補助的なものであることから「あそび的育児」とした。第4因子は、「洋服の着脱の手伝い」「トイレの介助」「寝かしつけ」「絵本」「保育園・幼稚園の送迎」「朝食」から構成されているため、「基本的育児」とした。

各変数の得点は図表-3に示すとおりである。

(2) 父親および母親の抑うつとの関連

図表-4は、父親および母親の抑うつと父親の家事・育児量（「食事関連育児」「掃除関連家事」「基本的育児」「あそび的育児」）との関連を示したものである。「基本的育児」と「あそび的育児」は内容的に異なるが、相関は.681と非常に高い。そのため、モデル1では「基本的育児」を、モデル2では「あそび的育児」を、それぞれ投入した。

図表-4からも明らかなように、父親の場合、食事関連家事、掃除関連家事、基本的育児、あそび的育児のいずれも、抑うつとの関連は認められなかった。しかし、母親については、父親の食事関連家事とはプラスの、基本的育児とはマイナスの関連が認められ（モデル1）、あそび的育児ともマイナスの関連が認められた（モデル2）。

また、父親の回答による母親の家事を投入したところ、父親、母親ともにマイナスの関連が認められた。つまり、母親の家事量が少ない場合に

図表-7 父親と母親の生活への満足度についての重回帰分析の結果

		父親 (n=191)		母親 (n=191)	
		モデル 1	モデル 2	モデル 1	モデル 2
		β	β	β	β
世帯収入	400万円未満	-.040	-.024	-.207 *	-.209 *
	600万円未満	-.187 *	-.173 +	-.289 **	-.287 **
	800万円未満	.036	.019	-.089	-.092
	1000万円未満	-.132	-.144 +	-.160 *	-.175 *
	1000万円以上		reference		
年齢			.000	-.010	
母親の学歴		.132	.137 +		
母親の就業状況	無職		reference		
	フルタイム	-.250 **	-.269 **	-.182 *	-.219 *
	パートタイム	-.197 *	-.189 +	-.046	-.013
	その他	-.075	-.072	-.141 +	-.137 +
父親の労働時間			.052	.056	
父親の食事関連家事		.079	.070	-.002	-.037
父親の掃除関連家事		-.122	-.099	-.018	-.022
父親の基本的育児		.166 *		.192 *	
父親のあそび的育児			.180 *		.279 **
調整済みR2値		.121	.116	.099	.116

+p<.10, *p<.05, ** p<.01
 β は標準偏回帰係数

は、父親、母親ともに抑うつ症状が高いことが示された。

(3) 父親の疲労症状との関連

図表-5は、父親の疲労症状と家事・育児量との関連について示したものである。

労働時間が長いほど疲労症状は高くなり、「管理職」は「事務販売職」「労務・現業職」と比較して低い傾向にある。「基本的育児」は疲労症状と何ら関連が認められないが、「あそび的育児」はマイナスの関連があり、あそび的育児量が高いほど疲労症状は低下する傾向にある。

また、母親（妻）の家事量が少ないほど、夫の疲労症状は高くなる。

(4) 母親の育児不安との関連

図表-6は、母親の育児不安と父親の家事・育児との関連を示したものである。父親の掃除関連家事とはマイナスの（モデル1）、父親のあそび的育児ともマイナス（モデル2）の関連を示してお

り、父親の関与が少ない場合には、母親の育児不安は高いことを示している（母親の家事は有意ではなかったため、分析から除いた）。

(5) 父親および母親の生活への満足度との関連

図表-7は父親および母親の生活への満足度と父親の家事・育児量との関連を示したものである。

父親では、妻の就業状況との関連が認められ、妻がフルタイムの場合、父親の家庭生活への満足度は無職の場合と比べて低く、パート

タイムの場合もその傾向が認められた。また、基本的育児量（モデル1）、あそび量（モデル2）ともプラスの関連が認められた。

母親でも、自身の就業状況との間に関連が認められ、無職と比較して、フルタイムで低く、その他でも低い傾向が認められた。基本的育児（モデル1）、父親のあそび的育児（モデル2）ともに、プラスの関連が認められ、父親の子育てへの関与の度合いが高い場合には、妻の生活満足度も高いことが明らかになった（母親〔妻〕の家事は有意な関連がみられなかったため、分析から除いた）。

5. 考察

本研究では、幼稚園、保育園にかよう子どもを持つ父親、母親を対象に、父親の回答による家事・育児の構造と、父親の家事・育児への関与と父親・母親の主観的健康との関連について検討した。

父親による家事・育児の構造は、食事関連家事、掃除関連家事、基本的育児、あそび的育児の

4 因子から構成されており、これらの結果は先行研究とも、また、私たちの日常における経験とも概ね一致する。基本的育児とあそび的育児の相関は非常に高いが、食事関連家事と掃除関連家事との間には、やや相関が見られるにとどまった。これらの結果は、父親については家事と育児は別々に取り扱うべきであることを示唆している。

重回帰分析の結果、父親では食事関連家事、掃除関連家事、基本的育児、あそび的育児のいずれにおいても抑うつとの関連は認められなかった。これは、父親の家事・育児への関与は非常に低く、抑うつとの関連が認められるほどのレベルにまで達していないためではないかと考えられる。Bird (1999) が用いたデータ (The two-wave National Survey of Functional Health Status by the National Opinion Research Center) では、既婚男性の家事・育児 (Housework) の割合は 36.7% (1 週間あたり 16.8 時間) であり、わが国の状況とはかなり異なる。

しかし、疲労症状と基本的育児の間にはマイナスの、生活満足度と、基本的育児、あそび的育児の間にはプラスの関連がそれぞれ認められた。疲労症状との関連については、仕事で疲れているため、子どもの面倒をみたり、子どもと遊んだりすることは難しい、という本モデルとは逆の関係も想定できる。父親の家事への関与は父親にとって役割負担を強いるものではなく、子育て (基本的育児、あそび的育児) への関与はむしろ好ましい、といえるだろう。

配偶者 (= 妻) の主観的健康との関連では、子育てへの父親の関与は、抑うつ、育児不安という陰性感情 (negative affect) だけでなく、生活への満足度という陽性感情 (positive affect) と関連していた。父親の子育てへの関与は、非常に望ましく、今後は父親が子育てに関与できるような環境整備をいかに進めるか、という点が、父親にとっても母親にとっても重要になってくる。

本研究では、母親 (妻) の家事との関連についても検討を行った。その結果、母親 (妻) の家事と夫の抑うつ、疲労症状とはマイナスの関係があり、母親自身の抑うつともマイナスの関係があっ

た。つまり、妻の家事量が少ない場合、夫の抑うつ症状や疲労症状は高くなり、妻自身の抑うつ症状も高くなる傾向にある、という不幸で歪んだ関係にある。家事労働の大半が依然として女性によって担われており、女性自身の中で就労との折り合いをつけながら完結する (西村 2001) 状況下においては、女性のバランスの崩壊は配偶者に重大な危機をもたらす可能性を孕んでいる。

最後に、本研究の限界と課題について言及する。第 1 に、本研究は、東京都区市部の幼稚園児、保育園児の父親と母親を対象としたものであるが、分析対象者の属性からもわかるように、高学歴、高収入世帯が多い。父親の労働時間から推測すると、長時間労働従事者が回答していない可能性もあり、多くの社会調査と同様、主観的健康が良好でない層が含まれていない可能性もある。そのため、一般化にあたっては、さらに対象や地域を拡大しての検証が必要であろう。

第 2 に、横断調査を用いての分析であるため、因果関係の特定が困難である。分析モデルは欧米におけるパネル調査を用いた先行研究を参考に作成したが、パネル調査を用いた研究そのものが多くはない。今後は、わが国でもパネル調査によるデータを用いた研究が必要であろう。

第 3 に、家事や育児の評価については、夫と妻の間でズレがしばしば生じており (岩井・稲葉 2000)、これは家族を対象とする研究全体の課題でもある。本研究では、家事・育児に関する変数は父親の回答だけを用いたが、母親の回答との関連を含めた検討も今後は必要である。

しかし、これらは決して本研究の意義を損なうものではなく、父親、母親双方にとってのよりよい家事・育児分担の可能性を本研究結果は示唆しており、家庭内における役割の再構築、あるいはサポート体制の確立に寄与すると考える。

〔謝辞〕 本研究の実施にあたり、ご協力くださいました保護者のみなさま、保育園・幼稚園関係者のみなさまに感謝申し上げます。

* 本論文は、財団法人家計経済研究所の 2004 年度研究振興助成事業の助成金に基づく研究成果である。

- 注
- 1) 2003年度お茶の水女子大学大学院前期集中講義 (7月21日~23日)「家族関係論」における石井クンツ昌子教授 (カリフォルニア大学リバーサイド校社会学部) のコメント。
- 2) 中央労働災害防止協会: <http://www.jisha.or.jp/>
- 文献
- 石井クンツ昌子, 1997, 「現代アメリカのジェンダーと家族研究——結婚、家事労働、父親と母親の役割についての考察」『社会関係研究』3 (1): 105-127.
- , 1998, 「米国における父親研究の動向」『家族社会学研究』10 (2): 135-141.
- 岩井紀子・稲葉昭英, 2000, 「家事に参加する夫、しない夫」盛山和夫編『日本の階層システム4——ジェンダー・市場・家族』東京大学出版会, 193-215.
- 大野裕・吉村公雄構成, 2001, 『WHO SUBI 手引——The Subjective Well-being Inventory』金子書房.
- 加藤邦子・石井クンツ昌子・牧野カツコ・土谷みち子, 1995, 「父親の育児参加を規定する要因」『家庭教育研究所紀要』20: 38-47.
- 小泉智恵・矢富直美・織田弥生・須藤綾子, 1996, 「研究職従事者における家事労働と心理的ストレス」『経営行動科学』10 (2): 111-119.
- 財団法人家計経済研究所編, 2003, 『家計・仕事・暮らしと女性の現在——消費生活に関するパネル調査 (第10年度)』国立印刷局.
- 島悟, 1998, 『CES-D Scale』, 千葉テストセンター.
- 清水新二, 2001, 「配偶関係、ジェンダーと心身的ディストレス——CES-D (うつ的傾向尺度得点) の分析」清水新二編『現代日本の家族意識——家庭生活についての全国調査 (NFR98) 報告書』2-4, 47-66.
- 須藤綾子・三木圭一・矢富直美・織田弥生・川崎道文, 1995, 「子どもを持つ女性の労働負担に関する心理生理的調査」『産業衛生学雑誌』37 (4): 245-252.
- 土肥伊都子・広沢俊宗・田中國夫, 1990, 「多重な役割従事に関する研究——役割従事タイプ、達成感と男性性、女性性の効果」『社会心理学研究』5: 137-145.
- 東京都立労働研究所編, 1994, 『共働き世帯のライフスタイルと疲労・ストレス』東京都立労働研究所.
- 直井道子編, 1989, 『家事の社会学』サイエンス社.
- 永井暁子, 2001, 「父親の家事・育児遂行の要因と子どもの家事参加への影響」『季刊家計経済研究』49, 44-53.
- 西村純子, 2001, 「女性の就業と家庭生活ストレイン——女性の就業は誰の利益か?」『哲学』106: 1-29.
- 福丸由佳, 2000, 「共働き世帯の夫婦における多重役割と抑うつ度との関連」『家族心理学研究』14: 151-162.
- 船橋恵子, 1999, 「父親の存在——開かれた父親論へ」渡邊秀樹編『変容する家族と子ども』教育出版, 85-105.
- 牧野カツコ・中西雪夫, 1985, 「乳幼児を持つ母親の育児不安」『家庭教育研究所紀要』6: 11-24.
- 牧野カツコ・中野由美子・柏木恵子編, 1996, 『子どもの発達と父親の役割』ミネルヴァ書房.
- 松田茂樹, 2001, 「育児ネットワークの構造と母親のWell-Being」『社会学評論』52 (1): 33-49.
- 松田茂樹・鈴木征男, 2002, 「夫婦の労働時間と家事時間の関係」『家族社会学研究』13 (2): 73-84.
- 山崎喜比古, 1991, 「家事・育児を分担する男性の新しいライフスタイルとコンフリクト」, 東京大学医学部保健社会学教室報告書.
- 吉井清子・山崎喜比古, 1999, 「中年期女性の就労や社会的活動が健康に及ぼす影響と役割特性の比較」『日本公衆衛生学会誌』46 (10): 869-882.
- Argyle, M., 1987, *The Psychology of Happiness*, London: Methuen. (=1994, 石田梅男訳『幸福の心理学』誠信書房.)
- Aneshensel, Carol, 1992, "Social Stress: Theory and Research," *Annual Review of Sociology*, 18: 15-38.
- Barnett, R. C., 1998, "Toward a Review and Reconceptualization of the Work/Family Literature," *Genetic, Social, and General Psychology Monographs*, 124 (2): 125-182.
- Berk, Sarah F., 1985, *The Gender Factory: The Apportionment of Work in American Households*, New York: Plenum Press.
- Berhheid, Catherine W., 1984, "Women's Work in the Home: Seems Like Old Times," Hess, Beth B. and Marvin B.Sussman eds., *Women and the Family: Two Decades of Change*. New York: Haworth Press Inc., 37-55.
- Bird, Chloe E., 1999, "Gender, Household Labor, and Psychological Distress: The Impact of the Amount and Division of Housework," *Journal of Health and Social Behavior*, 40 (1): 32-45.
- Bird, Chloe E. and A. M. Fremont, 1991, "Gender, Time Use, and Health," *Journal of Health and Social Behavior*, 32 (2): 114-129.
- Bowing, A., 1997, *Measuring Health: A Review of Quality of Life Measurement Scales*, 2nd ed., Buckingham: Open University Press.
- Glass, J. and Fujimoto, T., 1994, "Housework, Paid Work, and Depression among Husbands and Wives," *Journal of Health and Social Behavior*, 35: 179-191.
- Jorm, A. F., 1990, "Neurotic Symptoms and Subjective Well-being in a Community Sample: Different Sides of the Same Coin?" *Psychological Medicine*, 20 (3): 647-654.
- LaRossa, Ralph, 1988, "Fatherhood and Social Change," *Family Relations*, 37 (4): 451-457.
- Mclanahan, Sara and Julia Adams, 1987, "Parenthood and Psychological Well-being," *Annual Review of Sociology*, 13: 237-257.
- Mirowsky, John and Catherine E. Ross, 1995, "Sex

- Differences in Distress: Real or Artifact?" *American Sociological Review*, 60 (3): 449-468.
- Nagpal, R. and H. Sell, 1992, *Assessment of Subjective Well-Being: The Subjective Well-being inventory (SUBI)* (WHO Regional Health Paper, SEARO, No. 24), New Dehli: WHO.
- Oakley Ann, 1974, *The Sociology of Housework*, Oxford : Martin Robertson.
- Pina, D. and Bengtson, V., 1993, "The Division of Household Labor and Wives' Happiness: Ideology, Employment, and Perceptions of Support," *Journal of Marriage and the Family*, 55 (4): 901-912.
- Pleck, Joseph H., 1985, *Working Wives, Working Husbands*. California: Sage.

かにえ・のりこ お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程。主な論文に「就業意識」(『リーディングス日本の労働——職場と人間』日本労働研究機構, 1997)。家族社会学・健康社会学専攻。